

〔資料〕

看護職生涯発達学の視座からの看護基礎教育における学生のとらえ

古都昌子*

THE KNOWING OF NURSING STUDENTS IN BASIC NURSING EDUCATION
FROM THE PERSPECTIVE OF LIFELONG DEVELOPMENT FOR NURSES

Masako FURUICHI *

キーワード：看護基礎教育、看護職生涯発達学、看護学生

Key words : basic nursing education, lifelong development for nurses, nursing students

1. はじめに

医療・看護の現状は、2025年問題を視野にさらなる高齢化、医療需要の増大や多様化が予測され、看護職において質量の確保が急務とされている。看護の需要が増加する中、看護職は、社会からの期待が大きくなり、看護系大学は今なお増加し、看護師養成所の新設もみられる。多様な教育形態の中で看護職を目指す看護学生は、社会人入学生も増加し、今後さらに多様化することが予測される。看護基礎教育において、看護学生は、看護教育学の視座から看護学を学ぶ途上である人であり、「教授—学習活動」において、教えられる人として学習目標の達成を目指して学ぶ存在である(杉森, 舟島, 2014)。先行研究でも看護学生のアイデンティティ形成、キャリア形成、学習経験などについて明らかにする研究は多数取り組まれている(グレッグ, 1990; 2005; 杉森, グレッグ, 舟島, 1993; 宮脇, 2006; 2007; 2008; 大橋, 2006; 白鳥, 2009; 坂野, 2010)。

翻って、主観的な現実世界として看護学生の内側から見た時には、看護学生は、看護学を学びながら、看護職としての生涯発達に向けて何らかの準備をしていると考えられる。看護学生は、固有の経験を経て、職業選択の一つとして看護職を模索し、未来に向かって人生を生きる存在であるともいえる。

看護職生涯発達学は、佐藤により2004年に立ち上げられ、看護職のキャリア形成と支援を探求する学問領域であり、「基礎教育を含めて看護師が生涯にわたり

発達し続けることを支援する学問」と位置づけており、看護学生を「看護職として生涯発達していくひとりの人」としてしている(佐藤, 2007)。佐藤、柳田は、その共著(佐藤, 柳田, 陣田, 2011)において、看護学生の有する可能性に触れ、柳田は、看護学生は臨床実習の場で「生涯の生き方にまで影響が及ぶような重要な『気づき』を経験しており、今後の看護を変える気づきを投げかける存在である」と述べ、看護学生の可能性に目を向けている。また、ベナーは、ベナー看護論(Benner, 2005 / 井部, 2010)において、当時、看護学生はNovice(見習い尼僧)とされ、第1段階の初心者レベルとして、「客観的属性(体重、体温、血圧)から状況を学び、原則通りの行動しかできず、柔軟性に欠ける」とみなしていた。看護学生は看護職として、見習い、新人、一人前、熟達、エキスパートの区分において、第1段階に区分けされた立場であったといえる。

しかし、その後のベナーの著書(Benner, 2010 / 早野, 2011)においては、「看護学生は適切な支援があれば、看護師らしく行動できる」と述べ、今までの著書で述べてきた見方とは異なる視点で、臨床における看護学生の可能性を示し、教育の課題を指摘している。

看護学生が、看護師の知らない患者の苦悩を受けとめることにより、患者は目覚ましい回復をとげたり、精神的に安定するなどの変化をみせることもある。臨床実習でひとりの患者を受け持つ看護学生は、患者にとって特別な存在となり、「あなたがいたから頑張れた」と信頼を得る機会も多い。そのことに関連して、

*札幌市立大学看護学部 (Sapporo City University)

柳田ら（2011）も、看護学生の記述するエッセイをひも解く中で学生たちの、医療の現場における感性の素晴らしさについて述べ、看護職として時に「看護師しながら」に存在していると言及する。

また、看護学生は、生涯発達していく存在として青年期の自己を模索している存在である。教育カリキュラムの検討や、指導案を考える時の目標類型において、学習者観として学生理解を深め、指導案を作成することは方法論として確立されている。看護学教育において学生理解と言う言葉は用いられ、幾度も聞き及んだ言葉である。しかし、「人が人を理解する」ことは、看護で多用される「対象理解」と同様に真の意味では不可能である。ましてや、現代若者気質、新人類などの言葉に表象される世代間格差の生じる若者に対しての、「学生理解」は、困難である。しかし、看護の対象理解と同様に不可能であるからこそ、理解しようとし続けることが肝要である。看護学教育にかかわる者が、真の「学生理解」に近づき、人として人を大切にすることを看護を教育するには、人として看護学生を理解し、大切にすることを必要といえる。

II. 目的

以上から、本論では、理論的背景、先行研究において看護学を学ぶ学生が、どのようにとらえられるのかを概観し、看護職生涯発達学の視座からの看護学生のとらえについて言及する。それにより、看護学生の支援の方向性を検討する資料とすることを目的とする。

III. 文献の検討

医学中央雑誌で看護基礎教育 and 看護学生で検索すると1573件の研究がなされており、そのうち原著論文は846件である。看護基礎教育 and 看護学生 and 青年期で検索すると70件、看護基礎教育 and 看護学生 and 存在で検索すると19件の論文がヒットする（2016.2最終検索）。何れも学習者としての学生の状況を定点やある一定の期間で取り出し、学習到達状況などの現状を分析した研究が大半を占める。このように看護基礎教育の看護学生を取り巻く研究は多種多様に取り組みられているといっても過言ではない。

しかし、看護学生が看護職として生涯発達しているひとりの人であることを視野においた研究は見られなかった。そこで、著者は、発達段階の途上にある看護学生を人としてとらえるには、看護学の範疇を越えて

学際的な視野による理解を深めるための文献検討が重要であると考えた。そのため、1. 青年期を生きる看護学生をとらえる意図から発達段階の青年期の理解につながる理論および文献を対象とした。また、看護学生を看護職として生涯発達しているひとりの人としてとらえた研究の考え方と、従前の考え方とを比較する意図から、2. 学習者としての看護学生の理解として看護基礎教育における看護学生を対象とした文献を概観することとした。さらに「ひとりの人」に近い概念として、3. 青年期の発達課題を前提とした看護学生のアイデンティティの形成に関連した文献を検討した。なお、文献検討における倫理的配慮として著作権法（平成26年改正）に従い、著者の意図を損なわないように文献を用いた。

1. 青年期の理解に関連した理論および先行研究

青年期は発達段階においては、学童期、思春期に続く、成人期の入り口である。看護学を学ぶ学生は、近年、社会人経験をした学生や看護師養成所から編入学する看護学生など多様な入学背景を持つ看護学生も増加しつつあるが、19歳から22歳の青年期の看護学生が多数を占めている。看護学生の発達上の位置づけを考えると、エリクソンの精神分析的人格発達理論では、各発達段階にはそれぞれの段階において到達すべきライフタスクがあるとし、8段階の発達段階のうち、第5段階（思春期から19歳頃）、第6段階（若い成人の時期20代）を含む。この時期の固有の発達課題としてエリクソンは、アイデンティティの獲得とアイデンティティの拡散の克服、親密感の獲得と孤独感の克服としている（Erikson, 1959/小此木, 1973）。アイデンティティとは、エリクソンの理論の青年期における心理社会的危機を示す概念（心理学用語辞典, 2012）である。また、レビンソンは、主に成人期以降の発達について明らかにし、発達段階において次の段階へ移行する過渡期を置くことを特徴とした。レビンソンの発達理論が示す6段階のうち、第1段階・成人への過渡期（17歳から22歳）と第2段階・大人の世界へ入る時期（22歳から28歳）として、この時期の発達課題を未成年時代の世界からの卒業と大人の世界への進出、成人社会での可能性の模索と安定した生活構造の構造としている（舟島, 2011）。また、発達課題を身体的成熟、社会の文化的圧力、個人的価値や動機の3つを源泉とすると考えたハヴィガーストは、その特徴として仲間集団における結びつきが家庭や学校よりも強くなり、独立

性、人生観を発達させる時期 (Havighurst, 1953/ 荏司, 1995; 舟島, 2011) としている。しかし、それぞれの理論家の考えた発達段階と現在の社会とが乖離している点があることや文化的背景が影響していることから、青年期の理解の一助とはなるが、現代の青年期の特徴とは言い難い点も見られる。いずれにしても大人の世界の入り口に立つ時期であるといえる。服部 (2010) は、生涯発達人間論として、人間の一生涯という全行程を発達のプロセスとしてとらえ、発達を、「本来的に変化の過程であり、身体的・知的・情緒的・社会的等の諸相が互いに機能的に関連し合い、広い統一あるいは全体としてダイナミックに変化していくプロセス」と定義している。岡本 (2009) は、アイデンティティ生涯発達論の視点から、「『自己形成』の根幹は、『なりたい自分を見つけること』『なりたい自分になること』である」と青年期特有の課題について述べている。また、この時期は、自分はどんな人間なのか、そして自分はいったい誰なのかを問いかける時期で自分探しや自己発見により、人生の未来へ向かう時期ととらえられる。発達課題であるアイデンティティの確立を遂行することで次のキャリア発達の課題へ向かう時期ととらえる。スーパーのキャリアステージ論 (Super, 1957) では、15～24歳を探索期として試行錯誤を伴う現実的な探索活動を通じて職業が選択される時期とする。シャインのキャリアサイクル理論 (Schein, 1978) においても、成長、空想、探求の段階が該当する。

以上から、大多数の看護学生が該当する20歳前後の発達段階は、自分探しをしながら、現実的なキャリア発達への探索活動の時期と考えられる。看護学生は環境下において、成長と学習を要因として専門職としての発達を開花させていく可能性を持つ時期といえる。

2. 看護基礎教育における看護学生を対象とした先行研究の概観

看護基礎教育の研究は多様であるが、その中でも看護学実習の研究が数多くなされている。医学中央雑誌で看護学生 and 看護学実習で検索すると2524件に上る。看護学生の臨地実習全般を対象とした文献として、山下ら (2003) によって「看護学実習に関する研究内容の分析」として1994年～1998年に看護系学会誌5誌に掲載された434文献から232件を対象に検討している。看護教育学の視点からの質的検討により、実習に影響する可能性のある変数の抽出や

教授活動の質の向上に向けた研究の必要性および大学化を推進する研究の必要性について言及している。また、山下らは、看護学実習における看護学生の経験に関する研究の現状として1982年から2002年の研究を対象とした文献検討もしている。この論文では、看護学生の臨地実習における経験を、看護学生の実習科目ごとに実習前から実習後までの経験を取り出し、経験と学習活動、教授活動との関連などについてまとめている (山下, 定廣, 舟島, 2003)。小田 (2006) は臨地実習における看護学生の経験について1995年～2005年の文献をレビューし、10文献に絞りで検討している。その上で、10年間の397文献のうち、特定領域における研究や事例検討のような形で一人の看護学生の看護場面や指導場面をとりあげるような形で多く研究されていると述べている。

看護基礎教育における看護学生を対象とした先行研究では、学生の経験を幅広く捉えるというよりも、一つの領域や場面に限定した上でより具体的に現状をとらえる研究であり、実習指導教育への示唆を得ようとする目的で行われていることがわかる。さらに、2006年～2010年の過去5年間の臨床実習に関する991文献について研究タイプを概観した (古都, 2012) 結果、大学教員による研究がほぼ半数を占め、専門領域での実習科目ごとの具体的な研究が進められていた。学生を対象とする研究が856文献を占めるが、そのうち、427文献は、自記式アンケート調査、309文献は実習記録の記述やレポートなどの記述の質的分析であった。データ収集方法では、質問紙や既存の尺度などを用いた自記式アンケートを用いた研究が、471文献と約半数を占めていた。これらの対象文献は、看護学生の立場からとらえると言うより、看護学教育の視点から、学習目標を達成する学習者としての看護学生について分析した研究であり、教える側の教員の専門領域からの視点でまとめられた研究である。

一方では、看護学生を人としてとらえ、言及しているものを検索しても見当たらない。ハンドリサーチの結果、極めて少数ではあるが、研究論文ではない以下の文献があげられる。野島 (1976) は、人間看護学序説において、看護における「ひと」、看護する「私」を探究し、看護学生について「わたしの年若い友人たち」として自由に生き生きとした発想と、看護に真摯に悩む姿から学ばされたこと記述する。不安な患者を看護する場合の、看護学生と経験豊かな看護師について、「注意深く経験を積んだ看護師は、

未熟な初心者よりもより良い看護効果をあげることに無条件の同意はできない」とする。「それよりも、むしろ、一生懸命ではあるがおどおどしている。新しい知識を身につけてはいるが、それをいつ使ったらいいのかわからなくて、見当違いの失敗を重ねているように見える看護学生の方が、最終的にはむしろ患者に望ましい結果をもたらすことが生じ得る」と看護学生の特性について述べる。看護以外の領域から、柳田（2011）は、次の時代の医療を担う看護学生たちの、医療の現場における「気づき」の感性の素晴らしさについて言及し、学生は、臨地実習において生涯の生き方にまで影響が及ぶような重要な「気づき」を経験しており、今後の看護を変える気づきを投げかける存在であるとする。著書において、柳田は学生エッセイを次のように論評する。「いわゆる難しい患者とのコミュニケーションを取るにはどうすればよいかという難問の解決策を探るには、もはや教科書の枠内での思考ではまるで役に立たない。患者の個性に着目して個別性の対処がどうしても必要になってくる。それをみごとに乗り越えている」さらに、「学生が患者に対して真剣に聞こうとする態度があり、そこから『気づきの多重構造』が生まれる」と述べる。柳田は、「職業人として自分の感性や人間観や患者・医療者関係の取り方などについて高めていく『気づき』というものは、このように日常的に問題解決を目指して『いつも考えている』というひたむきな姿勢をベースにして、愛と思いやりをこめて患者と接している中から生まれてくるのだといえるのだろう。その流れの全体は、優れた一片の物語にさえなっている」と述べる。さらに柳田は、看護学生について「冷静、客観的に医学や看護学をベースに置いた対応をする『三人称の視点』で割り切るのではなく、自分が患者あるいは患者の家族だったらと言う一人称、二人称の立場の人に寄り追う『二、五人称の視点』がある」と述べる。

野島は、看護学生の弱さを強みとし、柳田は看護学生のたくましさ、ピュアな感性について取り上げており、それぞれの論点は異なる中で同質の気づきがある。看護学生が、「いつも（患者や患者家族について）考えている」、人として向き合うことを大切にすることは、臨床での特性ともいえる力ではないか。専門的な知識・技術を十分に兼ね備えないからこそ、人としての感性や力が浮き彫りにされ、患者の求める看護につながる可能性があるといえる。

3. 看護学生のアイデンティティの形成に関連した文献

看護学生の理解に関連する概念としてアイデンティティがある。アイデンティティとは、エリクソンの精神分析的人格発達理論の青年期（第5段階）における心理社会的危機を示す概念（心理学用語辞典，2012）である。精神分析的な自我心理学の基本概念とされ、「主体性」、「自分であることの独自性」、「自分であること」などの意味を持つとされ（宮崎，2008）、「自己同一性」とも訳される。これらは、自分について自己の意識に視点を向けた時の概念である。

先行研究において、看護学生のアイデンティティに関連した研究が進められてきた。看護学生のアイデンティティについては、「発達心理学」「教育心理学」「社会心理学」「職業心理学」などの学問領域と関連して、取り組まれている。職業的アイデンティティに関連して、看護学生の職業意識などに関する研究は1970年代から取り組まれている（小嶋，1975）。その後、アイデンティティ形成（波多野，1993）の用語が用いられ、看護学生の学びの進度ごとに職業意識を比較した研究（畑瀬，2009）や、各養成課程の職業意識の比較（坂野，2010）、職業的アイデンティティの形成過程についてなどの研究が数多くなされてきた。山内（2009）は、現代の看護系大学生の生活における職業的アイデンティティの形成過程について、ライフストーリー法を用いて、明らかにし、職業的アイデンティティの形成過程の中心的なテーマは、看護職は自分に向いているか、自分にできるかという看護職としての自分探しであるとしている。また、2000年頃から「社会学」の研究として、アイデンティティ形成につながる経験の社会性の獲得（杉森ほか，1993）に着眼し、職業人として社会に向かう社会的形成過程としての「職業的社会化」をkeywordにした研究が取り組まれている。「職業的社会化」をひとつの発達過程とした場合、職業につくまでの「職業への社会化」と職業についてからの「職業による社会化」へ進むとされている（細谷ほか，1990；舟島，2011）。「職業的社会化」は、2000年頃より増加傾向が顕著となったひきこもり、フリーター、ニートなどの社会化に関連した青年期の課題が背景にあることが関連していると考えられる。「職業的社会化」については、看護学生と他学部の学生を比較した検討（白鳥，2002）や養成所の看護学生を対象にした研究（水方，2007）などがなされてい

る。宮脇（2007～2009）は、4年制の大学における看護学生の「職業への社会化」について、カリキュラムや日常生活体験が看護職への社会化に影響しているのか、1年次から4年次の年次ごとのデータを分析し、社会化に必要な要素を抽出している。

このように看護学生のアイデンティティの形成に関する先行研究は多数なされているが、いずれも、前述した心理学的、社会学的な学問の視座から、看護学生のある一定の学習時期を選定した「点」の状況での結果が示されている。中には、いくつかの点を結んで、アイデンティティの形成を明らかにした研究はなされているが、ここでも、学習者としての視点から見た研究である。

キャリア形成の視点から、看護学生が看護職としてどのように自己を形成していくのかについて述べた文献として、ベナーは、学生の「形成（formation）」の必要性を述べている（Benner, 2010 / 早野, 2011）。この著書は、「ベナーナースを育てる」という邦文書名がつけられているように、看護学生が看護職としてどのように自己を形成していくのか、それをいかに教育的に支援するのかに焦点があてられている。同書には、「学生の形成は、その技術的実践と高度に人間的なかわりを要する仕事の枠内で生じる」とある。ここでベナーの言う仕事とは、看護の仕事、看護の実践を意味する。ベナーの述べる「形成」は、あくまでも看護実践から生じ、看護実践へ帰結する臨床看護の目線である。臨床の場での実践から得られる技術的課題、倫理的課題との出会いが、看護学生の内面へ強い影響を及ぼすことを指摘している。このように、看護学生にとって、何らかの契機として臨床の場での出会いや、教育技法が関与することは十分に考えられる。しかし、それは、看護学生として過ごすすべての生活の中で形成されるものであり、講義、演習、実習や看護学生としての生活を切り分けるだけでは、生涯発達していく人としての経験を分断すると考える。

看護職としての生涯発達を考える時に、ライフイベントや自らの人生観、価値観を揺さぶられる経験は、その発達に関与するものであり、看護学生にとっても同様であると考え。すなわち、看護学生の経験によって、その全体の中で生じる人間的な変化も含みながら、とらえることが必要であると示唆された。

IV. 考 察

看護学生に関連した文献を概観し、看護職生涯発達学の視座から新たな看護学生のとらえの必要性について考察する。

先行研究を概観したが、大半の研究は、学習者としての看護学生ととらえていた。青年期を生きるひととしてとらえた文献は少ない。看護職生涯発達学では、看護学生を「看護職として生涯発達していくひとりの人」であるとしている。ひとりの人、すなわち内面から見れば「私」である。看護学研究において、「私」をkeywordとする研究はほとんど無いと言っても良い。元来、日本において、「仕事には私情を挟まない」という考え方がある。武井（2010）は、「私情という日本語は奇妙である。公に認められる感情とそうでない感情とがある」と指摘する。公に認められない個人の感情は、「私情を挟む」「私情に流される」などと良い意味では用いられない。このように「私」の意味は、個人そのものを示し、プライベートの意味合いが強くなるために専門職としての「私」、学習者としての「私」では扱われないため、研究的な視点からも取り扱われないのが常である。看護学生にかかわる人々は、看護学生について青年期を生きるひとりの人としてとらえる必要がある。また、看護学生が青年期を生きる中で出会った経験は、学習者としての「人」に限定せず、青年期の「人」である意識を高める必要があるのではないか。

著者は、看護基礎教育のカリキュラム開発として、「人間存在を尊重した看護実践を顕在化させたカリキュラム開発」（古都, 2008）に取り組んだ際に「人間存在とは何か」の問いに答えることを目的に文献検討を行った。哲学、法学、社会学、心理学、人間関係論、人間科学、看護学などの文献を紐解き、自己の解釈も統合し、「人間存在とは、人間として意味をもって生きるありようの全てであり、『今ここにある人間』を包括したとらえである」と定義した。看護学生もまぎれもないこの「人間存在」である。ベナー（2010）が、「学生の現在の臨床経験だけでなく、これまでの人生における経験も活用する」として人として生きる学生の経験を掘り下げる必要性について述べているように看護学生について、より多角的に新たなとらえをしていくことが必要である。

V. まとめおよび今後の課題

看護職生涯発達学の視座からの「看護職として生涯発達していくひとりの人」は、学習者に留まらない看護学生の新たなとらえであり、かけがえのない人間存在の見方・考え方とつながってその可能性を引き出すことにつながる。

看護学生が、看護基礎教育の学習目標を達成する学習者であることは言うまでもないが、同時に無限大の可能性を有し、青年期を生きる「私」として、看護職として未来に向かう存在であることを意識においたとらえが必要である。

今後、看護職生涯発達学の研究者、教育者が、教育・研究活動により、看護学生の人間存在としてのありようを明らかにしていく必要性がある。

本論文は平成 26 年度東京女子医科大学大学院看護学研究科博士論文の一部を編集し、加筆修正したものである。

引用文献

- Benner, P. (2005) / 井部俊子 (2010) . ベナー看護論 新訳版, 東京.
- Benner, P. (2010) / 早野 ZITO 真佐子 (2011). ベナーズを育てる, 医学書院, 東京.
- Erikson, E.H. (1959) / 小此木啓吾 (1973) . Identity and the life cycle, 『自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル』 誠信書房, 東京.
- 舟島なをみ (2011) . 看護のための人間発達学 第 4 版, 医学書院, 東京.
- 古都昌子 (2012) . 看護基礎教育の臨床実習に関する過去 5 年間の研究タイプの概観, 東京女子医科大学看護学会誌, 第 7 巻第 1 号, 33-38.
- 古都昌子 (2008) . 人間存在を尊重した看護実践を顕在化させたカリキュラム開発, 日本看護学教育学会, 第 18 回学術集会講演集.
- 服部祥子 (2010) . 生涯人間発達論 第 2 版, 医学書院, p2, 東京.
- グレッグ美鈴ほか (1990) . 看護学生の同一性形成に及ぼす教育課程の影響 - 半構造化面接法による追跡調査, 全国看護教育研究会誌, 22, 96-108.
- グレッグ美鈴ほか (2005) . 看護職者のキャリアマネジメントのあり方, 岐阜県立看護大学紀要, 5(1), 3-9.
- 小島艶子 (1975) . 看護学生の職業意識の形成に関する研究, 看護研究, 8, 46-61.
- 小山真理子 (2003) . 看護教育の原理と歴史, 医学書院, 80, 東京.
- 宮脇美穂子 (2006,2007,2008) . 4 年制大学における看護学生の職業的社会化, 医療看護研究, 2(1), 3(1), 4(1), 142. 64-68. 57-63.
- 宮崎冴子 (2008) . キャリア形成・能力開発「生きる力」を育むために, 文化書房博文社, 東京.
- 野島良子 (1976) . 人間看護学序説, 医学書院, p42, 東京.
- 小田亜希子 (2006) . 臨地実習における看護学生の経験 1995 年から 2005 年の研究を対象として, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター研究集録, 31, 69-76.
- 岡本祐子 (2009) . アイデンティティ生涯発達論の射程, ミネルヴァ書房, 東京.
- 大橋ゆかりほか (2006) . 臨床実習教育が看護学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果, 理学療法学, 33(6), 311-317.
- 坂野純子ほか (2010) . 看護学生の職業意識に関する研究, 日本公衆衛生学会総会抄録集, 69 回, 491.
- 佐藤紀子 (2007) . 看護師の臨床の『知』, 医学書院, p13, 東京.
- 杉森みど里, グレッグ美鈴, 舟島なをみ (1993) . 看護基礎教育課程における看護学生の同一性形成に関わる経験の分析 - 臨床経験 2 年目の看護婦の面接調査から, 千葉大学看護学部紀要, 15, 9-15.
- 白鳥さつき (2009) . 看護大学生が看護職を自己の職業と決定するまでのプロセスの構造, 日本看護研究学会雑誌, 32(1), 113-123.
- 杉森みど里, 舟島なをみ (2014) . 看護教育学第 5 版増補版, 医学書院, p36, 東京.
- 武井麻子 (2010) . 感情と看護, 医学書院, 東京.
- 山内栄子, 松本葉子, 山本雅子 (2009) . 現代の看護系大学生の学生生活における職業的アイデンティティの形成過程, 日本看護学教育学会誌, 18(3), 11-24.
- 山下暢子, 定廣和香子, 舟島なをみ (2003) . 1994 年から 1998 年における看護学実習に関する研究内容の分析, 一看護学生を対象とした研究に焦点をあてて一, 看護教育学研究, 12(1), 29-36.
- 柳田邦夫, 陣田泰子, 佐藤紀子 (2011) . その先の看護を変える気づき, 医学書院, 東京. 心理学用語辞典 .<http://www.geocities.co.jp/Berkeley/9356/jiten/jmain.html>